

市民の命を守る防災組織を、市民の手で

千歳市 千歳市防災マスターリーダー会

「AEDの使い方をご存知ですか？」

自主防災組織のリーダー養成を目的とする「千歳市防災マスターリーダー会」の山口満会長（66）に訊かれた。

駅構内やデパートなどに設置されているのをよく見かけるが、使用方法はまったく分からない。「使ったことがないのと、1回でもあるのとは大違いなんですよ。せっかくだから、ちょっとやってみましょうか」と言いながら、山口会長はAEDを取り出し、ダミー人形の横に置いた。

AEDの電源を入れると、器具から音声で指示が出る。その順番通りに進めていくだけだ。使ったことがなければ、それすら分からない。

「電気パットを胸に当てて下さい」

機械の音がする。その位置は、パットにイラストが描かれているためすぐ分かった。ただ、「素人が、電気ショックなんて……怖い……できるのか」と、勝手に思っていたが、ショックを与えるかどうかは機械が判断してくれる。

「電気ショックが必要です。赤いボタンを押してください」

機械が喋った。

「簡単でしょ。赤いボタンを押してください。あとは、救急車が到着するまで、ひたすら心臓マッサージを続けて」

山口会長は、「こう、こうやって手の甲を使って、この部分ですから」と、額にうすうすと汗を滲ませながら続けている。



ダミー人形で心臓マッサージのやり方を実演する山口会長

——いつ災害が起こって、AEDを使う状況になってもおかしくない。

2014年版の「地震動予測地図」(文部科学省)によれば、今後30年以内に震度6弱以上の地震が発生する確率は、東京都心で46%、横浜市78%、さいたま市51%となっており、前年度発表の数字よりも最大20ポイント以上発生確率が上昇している。北海道では根室市が最も高く68%、発生確率も上方修正された。

こうした状況において、災害時に素早い

対応ができる自主防災組織の結成が急務だ。その必要性は、阪神・淡路大震災でも証明されている。震災で倒壊した家屋から救出された人の8割が家族や近隣住民の手によるもので、消防・警察・自衛隊による救出者は2割にとどまっている。そのうえ、災害発生から24時間以内の救出であれば、生存率も高い。時間を追うごとに生存率は下がり、3日過ぎればほぼ絶望になってしまう。(平成15年度版防災白書より)

■ 自主防災組織の結成を目的に

千歳市では、自衛隊関係者が多く在住することもあり、災害に強い防災都市を目指して、2010年(平成22年)に、市防災学習交流センター「そなえーる」を開設した。このセンターを中心にして市民の防災意識を高め、自主防災組織の結成を促している。この後の2011年3月に東日本大震災が発生し、組織結成の機運が一層高まった。

そうした背景があり、防災組織リーダー育成のための組織作りは必要不可欠であった。組織結成のための意見交換会や準備委員会などが行われ、2011年(平成23年)6月18日、「千歳市防災マスターリーダー会」が発足。防災専門の知識を持った消防隊員、警察官、自衛隊員、そのOBや、防災指導の認定を受けた市民や市役所職員ら24人が会員となり、自衛隊OBの山口満さんが会長に選ばれた。

現在(2014年11月)、同会員は36人。そのうち20人は、防災指導の資格を持つ防災マスターだ。具体的な活動は、千

歳市が実施する「市提案型協働事業」を受託、町内会や地域団体、企業などを対象に防災に関わる出前講習会を行っている。主なテーマは3種類。机上で行う模擬訓練「災害に備えて」と、救命講習会「知っておきたい応急手当て」、防災意識を高め自主防災組織の結成を促すことを目的にしている「自主防災会活動の推進」である。

「災害に備えて」は、災害時の模擬訓練を机上で行うといった内容。災害図上訓練「DIG」(ディグ)と呼ばれるやり方で、地図上に避難所や病院、公共施設などを記載、災害が発生した場合の避難所までのルート作りや、病院の場所を確認するといった図上訓練である。避難所運営訓練「HUG」(ハグ)もあり、これは、避難所に見立てた平面図を作成、避難者がそれぞれ抱える事情を書いたカードを平面図に配置したり、避難所で起こる様々な出来事にどう対処していくかの模擬訓練。応急手当の講習会では、AEDの使用方法や「レサシアン」というダミー人形を利用した心肺蘇生法などの緊急救命措置について説明する。



災害図上訓練「DIG」(ディグ)について説明する山口会長

平成 25 年度の事業報告書によれば、出前講習会の実績（平成 25 年 4 月～同 26 年 1 月）は 25 件、受講者数は 727 人に及んでいる。そのほか、防災フォーラムの実施（参加者 86 人）、千歳市の防災訓練に指導員を派遣、「そなえーる」防災イベントの支援（3 回）など積極的に活動を行っている。

こうした事業の運営費は、千歳市からの事業受託費の約 150 万円と、会費（年間 1000 円）で賄われ、支出の内訳は、指導員に対する謝礼・人件費や、講習用品などの機材・備品購入が主な支出となっている。



町内会への出前講習会で、机上で行う模擬訓練についての説明

■ 組織の結成率が上昇

防災マスターリーダー会では講習会の後、受講者にアンケート調査を毎回行いその都度、改善点を見つけ、講師の質の向上にも役立っている。これまでのアンケート調査によれば、86%もの受講者が「図上訓練 D I G には、防災意識を高める効果がある」と回答しており、D I G 講習会の評価も高い。

活動成果も数字として出ている。同会結成時（平成 23 年度）57.7%であった千歳市の自主防災組織の結成率は、平成 26 年度には 70.2%となっており、まだ全国平均の 77.4%には届かないものの、大きく上昇している。

■ 防災組織の重要性を痛感

ダミー人形から手を離れた山口会長は、「千歳にも必ず大きな地震がきます。私たちと市が連携して、防災リーダーを育てていくことが必要なんです」と、前を見据える。

山口会長は、元陸上自衛官。人命救助や災害派遣に多く出動した経験を持つ。とくに印象に残っているのは、2000 年（平成 12 年）に発生した有珠山噴火だったという。第 7 師団司令部に勤務していた山口会長は、指揮担当の幕僚だった。当時、伊達市役所内に師団が設けた現地指揮所にいた。

「あのときは不眠不休でした」

そう振り返る。

「現地を回ると、火口付近では地盤が隆起して……、道路も寸断されて……、噴石が当たって建物が破壊されていました。泥流が、洞爺湖温泉街の近くまで迫ってきました」

自然の力を思い知らされたと、語る。

「ただ、救いは人的被害がなかったことです。住民につながりがあったからこそ、住民同士が協力して被害が軽減できたのです」

こうした経験から、自主防災組織の重要性を痛感したという。

「市民の命を守る組織を、市民の手で作らなければいけないのです」

山口会長は、訴える。

また、同席していたメンバーで、北海道地域防災マスターでもある二ツ川憲昭さんは、説明する。

「救助を待つという意識、いわゆる『公助』ではなく、自分たちで助け合うといった『共助』『自助』を中心にした意識に転換することが大切なのです」

市民の意識は「公助」が7割、「共助」2割、「自助」1割で、「きっと助けてもらえる」と心のどこかで思っている。しかし、災害発生時、そうした意識では助からない。「公助」が1割、「共助」2割、「自助」7割と、その意識を逆転させなければならぬと、力説する。



防災マスターリーダー会で行っている救命講習会。講師も参加者も真剣そのもの

「危機意識はあるのですが、まだまだ意識は低いのです。災害を遠い出来事のように感じているのですよ」と、二ツ川さん。

■ 質の高い指導者の養成を

今後の課題について尋ねると、山口会長はAEDを片付ける手を止めた。

「質の高い指導者の養成が目標です」

明瞭に答えた。

防災組織がいろいろな場所で結成されれば、そのニーズも広がります。そうした幅広いニーズに対応するため、指導員の増員と資質の向上が急務であり、指導員養成研修会などを積極的に開催したいという。

「目標は、各町内すべてに防災リーダーを配置できること。それぞれリーダーがいれば、地域に応じた訓練が実施できます。地域ごとに防災意識が高まれば、千歳の防災力はさらに高まるはず」

山口会長は力強く語ってくれた。

「たとえ一人でも要請があれば、出前講座をやりますよ」その言葉には説得力がある。筆者一人のために、汗ばむまで心臓マッサージの実演を続けたのだから。

■ 連絡先

〒066-0075

千歳市北信濃 631-11

千歳市防災学習交流センター内

千歳市防災マスターリーダー会

会長 山口 満 (やまぐち みつる)

TEL 0123-26-9991

FAX 0123-26-9992